

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520284

研究課題名(和文)日本の 辺境 における英文学研究に関する研究 - 沖縄と北海道を中心に

研究課題名(英文) A Study on the English literary studies in the frontier areas of Japan (Okinawa and Hokkaido)

研究代表者

齋藤 一 (SAITO, Hajime)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20302341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、第一に、北海道における「英学」の確立を目指しつつも中央/周縁の論理を反復してしまった玉井武(小樽商科大学)の業績を再検討し、論文として発表したことである。(付け加えるならば、北海道や広島での調査の結果、清水春雄(北海道出身、広島で被曝、岐阜と小樽においてホイットマンを研究した)の存在を発見することもできた。)第二に、沖縄戦と米軍占領を経験しつつもアメリカの文学を研究した沖縄の英米文学者(特に琉球大学)の著作や紀要論文等に彼ら彼女らの苦渋を読み取るための調査をおこなったことである。

研究成果の概要(英文)： This research project has brought about two results. The first one is concerned about Takeshi Tamai, a Hokkaido-born teacher of English who, during 1950's, attempted to write a unique history of English studies in Hokkaido that, in fact, could never go beyond the logic of "center" and "periphery", the logic that ruled both Tamai's history and its Tokyo counterpart. In addition to Tamai, this project could shed light on Haruo Shimizu, another Hokkaido-born teacher of American literature, who, after experienced the atomic blast in Hiroshima, has studied Walt Whitman and has never been ruled by the center / periphery logic.

The second one is concerned about the agonies that Okinawan (Ryukyu University) scholars of English and American literature -- the literature of the former "enemies" -- have experienced after 1945.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学研究 沖縄 北海道 辺境 中央と周縁 玉井武 清水春雄

1. 研究開始当初の背景

本研究の出発点は、齋藤の著書『帝国日本の英文学』(2006年)である。これは、日本の英文学研究が日本の近代化(「脱亜入欧」と「西欧近代の超克」)を促進する役割を果たしていたことを論じたものである(取り上げた雑誌や人物は以下のとおり:雑誌『英語青年』、英語英文学者の市河三喜、岡倉由三郎、中野好夫、そして独自の方法で英文学に取り組んだ小説家の中島敦)。

ただし、本書の大きな欠点として、(1)1945年以降の問題を扱うことができなかったこと、そして(2)本書における「日本の英文学研究」とは主に東京在住者によるものであり、その結果東京以外の地域における英文学研究の可能性と問題点を扱うことができなかった、という二点を指摘しておくべきであろう。本研究は(2)の問題に取り組むべく始まった。

2. 研究の目的

本研究は、沖縄と北海道という日本の「辺境」における英文学研究が「中央(主に東京)」とはことなる営為を重ねてきた事実を調査研究し、その意義を考察することで、伝統的な英文学という学問領域の刷新を目指すものである。

重要なのは、沖縄と北海道(齋藤の出身地)という「辺境」における英文学研究の意義をことさら持ち上げて、中央(東京)のそれに対抗しようという英文学者や英文学研究には批判的な目を向ける必要があるということである。それは単に中央/辺境の論理の再生産であり、俗な言い方をすれば、「お山の大将」の再生産である。この論理に絡め取られない英文学研究の可能性を探ることも、本研究の大きな目的である。これも俗な言い方をすれば、「来る者拒まず去る者追わず」の論理の実践を正しく評価することである。(実際には、東日本大震災への対応のため、平成23年3月以降は調査研究に専念する十分な時間を確保することができなかったこともあり、後者の評価については不十分なままに研究期間が終了してしまった。)

3. 研究の方法

本研究の方法としては、北海道や沖縄における資料調査と、研究発表をきっかけとしての情報交換をあげることができる。

資料調査は以下の通りおこなった。

- (1) 平成23年10月1日、北海道大学附属図書館
- (2) 平成24年3月24日~27日、北海道大学附属図書館
- (3) 平成24年8月10日~17日、小樽商科大学附属図書館・北海道大学附属図書館
- (4) 平成26年3月12日~15日、岐阜女子大学附属図書館
- (5) 平成26年3月17日~21日、琉球大

学附属図書館

資料調査の成果については4.において述べる。

4. 研究成果

研究成果を年度順に概説する。

2011(平成23)年度は東日本大震災と原発事故への対応のため、夏季休暇を利用した調査研究を十分に行なうことができなかった。具体的には、中央ではない場所で英文学研究を行なうことの問題と、英文学研究そのものの意義を問いなおすために口頭発表(2回)をおこない、意見交換をするにとどまった。

この口頭発表(5.[学会発表])においては、三輪明という静岡大学で教鞭をとっていた英文学者に焦点をあて(中島敦『光と風と夢』の英訳を出版した)、「地方」在住者だからといって「地方」の問題を意識しつつ英文学研究を行なう研究者ばかりではないことを確認した。議論の概要は以下のとおり。一三輪は、「南洋」を舞台とし、主人公をロバート・ルイス・スティーブンソンとした『光と風と夢』(サモア独立に奔走するスティーブンソンの姿が描写されている)の英訳を出版し(1962年)、その序文において南太平洋諸島の政治問題(独立)について触れていながらも、静岡県焼津市からピキニ諸島へ出港し被曝した第五福竜丸の問題(1954年)に触れることはなかった。序文ですら第五福竜丸事件に触れなかった三輪の「核」への忌避は、おそらく戦後の日本の英米文学者の抱えていた問題、アメリカとどう向き合うかという問題と通底しているだろう。

次に、5.[学会発表]においては、広島平和記念公園の有名な碑文「安らかにお眠りください あやまちは繰り返しませぬから」の発案者、広島市の英文学者の雑賀忠義について、主に日本文学の領域における先行研究を踏まえつつ、英文学者の社会問題への関わり方について考察した。(この発表のあと、雑賀がこの碑文を作り上げるに際しては、占領下の日本に来ていたアメリカの大学関係者との交渉や対話が影響を与えていたことを知ることとなった。また、雑賀の碑文を英文学者の壽岳文章が痛烈に批判していたことも知った。)

なお、以上述べた、1945年以降の日本の英米文学研究とアメリカとの問題については、別の科研費研究において調査研究を継続していくこととしている。(参考:基盤研究(B)課題番号:24320055、「ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究—トランスパシフィックな文学的想像力と政治学」、2014(平成26)年~2016(平成28)年度、研究代表:越智博美、研究分担者:吉原ゆかり、齋藤一、井上間従文)

2012(平成24)年度は、北海道での調査研究に力を入れ、成果を上げることができた。3月の北海道大学附属図書館での調査、8月

の同大学と小樽商科大学での調査によって、玉井武と清水春雄という北海道出身の英文学者の存在を知ることとなった。

玉井は北海道生まれ、小樽商科大学と藤女子大学（札幌市）で教鞭をとった英語教師だったが、玉井が1950年代に構想した「北海道英学史」は、アジア・太平洋戦争中の北進論—1945年12月の開戦以降、南方進出の重要性が盛んに喧伝されるようになったが、その風潮に対抗し、中国東北部への進出の重要性を強調する論—に対応して改革をおこなっていた小樽商業高等学校（1944年からは小樽経済専門学校）の幹部たちの発言をふまえたものであった。具体的にいえば、玉井は、日本の英学史（おそらく豊田実の名著〔1939年〕を念頭においていた）の起源を、1930年代からしばしば日本のマスメディアで取り上げられていた、ネイティブアメリカンの血をひくロナルド・マクドナルドという幕末期のアメリカ人英語教師の北海道利尻島漂着に置いた上で、いわば北海道を新たな中心とした「北海道英学史」を書こうと試みたのである。このことについては12月の研究会で口頭発表をおこない（5〔学会発表〕）、2013（平成25）年度末に研究論文を執筆・発表した（5〔雑誌論文〕）。

一方、清水については十分な調査ができたとはいえない。8月の調査で齋藤は清水の存在に気づいたが（小樽商科大学の学生新聞『緑丘新聞』復刻版を読破した結果、学生による清水へのインタビュー記事1955年を発見したが、成果はそれだけである）、清水は北海道根室市生まれ、小樽商科大学（小樽商業高等学校）を卒業後、中学の英語教師として40代になるまで教鞭をとっていたが、その後広島高等師範学校に入学（当時では最長老の学生）、アメリカ詩を研究していたが、1945年8月に被爆、急性放射線障害のため根室で静養、その後は岐阜短期大学、小樽商科大学、岐阜女子大学で教鞭をとりつつ、一貫してアメリカの詩人、ウォルト・ホイットマンを研究し続けていた人物である。辺境と中央の論理とは無縁な（中央たる東京とは無縁—ただしこの場合広島市をどのように位置づけるかという問題はあ—

辺境や地方を渡り歩いていた）この清水については、先行研究どころか回顧録なども非常に少なく（没年も未詳）、次年度も調査を継続することとした。

2013（平成25）年度は、清水についての調査の継続、玉井についての論文執筆、そして沖縄での調査研究をおこなった。

玉井についての論文執筆・発表についてはすでに述べた。

清水については、2014（平成26）年3月に、清水が最後につとめた岐阜女子大学附属図書館で調査をおこなった。その結果、清水が1986年に退職する際のスピーチ（学部学生によるワープロでの文字起こし）を発見することができた。それによれば、清水は広島での

被曝のことを忘れたことはなく、「敵」のことを知るためにホイットマン他の英文学を研究し続けたのだとあった。他方、清水についての当時の学生の回顧録等によれば、教室や研究論文において直接原爆や各の問題について触れるタイプの教師ではなかったこともわかってきた。清水については、本研究が終了後も調査研究を継続する。その際、「核」や「原子爆弾」については寡黙であった福原麟太郎（広島県出身）と一緒に検討することで、彼らとは逆の立場をとった寿岳文章や大原三八雄などの英米文学者との違いを浮かび上がらせることを目指している。（福原については上述した科学研究費プロジェクト〔基盤研究(B) 課題番号:24320055〕にて口頭発表と論文（共著の分担）にて成果を発表している。）

寿岳と大原について付言しておけば、後者の主要業績の一つである『原爆詩集』英訳版の刊行事業については、私（齋藤）はすでにその多くの版を入手している。さらに調査が必要なのは、大原が、自らの専門であったラファエル前派師の研究と、峠三吉らを含む詩人による原爆詩の英訳刊行事業とをどのように関係づけたのか、あるいは関係づけなかったのかについてである。この点は大原のラファエル前派詩人論を精読する必要がある。なお寿岳については、現状では予備的調査を始めたに過ぎないことを明言しておく。

沖縄の英米文学者については、沖縄のアイデンティティや自身の英学修行について積極的に発言している米須興文の著作は、本研究資金によってほぼ揃えることができた。しかし、言うまでもないが米須が沖縄の英米文学研究を代表するわけではない。米須が勤務していた琉球大学（本土復帰前）の、他の英米文学者の業績についてはこれまで十分に調査され評価されてこなかった。そこで、2014（平成26）年3月に琉球大学附属図書館にて、米軍統治下の琉球大学における人文系の紀要論文を読むという作業をおこなった。この成果についてはまだ発表をおこなっておらず、これも本研究終了後も継続して行なうべき調査研究の一つである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

齋藤一、「北進論と玉井武の北海道英学史」、文藝言語研究（文藝篇）査読有、65巻、2014（平成25）年3月、1-16

〔学会発表〕（計3件）

齋藤一、「北方と混淆性—玉井武「北海道に於ける英學の發達」(1950)について」、文学受容変容研究会（第2回）2012（平成24）年12月27日、東洋大学白山キャンパス 研究発表

齋藤一、「広島原爆碑文の「主語」をめぐって」、第三回高麗大学校・筑波大学合同フォーラムセッション「アジア研究におけるグローバルという視点」、2012（平成24）年2月10日、高麗大学校（大韓民国） 招待講演
齋藤一、「ある英文学者の肖像：三輪明と翻訳」、日本英文学会北海道支部第56回シンポジウム「個別の受容から迫る「日本の英文学受容」」、2011（平成23）年10月2日、札幌学院大学（北海道札幌市）シンポジウムへの参加

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 一（SAITO, Hajime）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20302341